


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 南 潤 珍 

学位申請者 鄭 賢児(ジョン・ヒョンア)

論文名 友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究
ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー

結論

鄭賢児氏から提出された博士学位請求論文「友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」について、南潤珍が主査をつとめ、副査として学内の宇佐美まゆみ教授（指導教員）、谷口龍子准教授の両氏と、本学在任中、申請者の修士論文等の指導に協力いただいた井上史雄教授（本学名誉教授、国立国語研究所）、田島信元教授（本学名誉教授、白百合女子大学文学部）のお二人を学外からお招きし、合計五名から成る審査委員会で、上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

論文の概要

本論文は、条件を統制した日本語母語話者男女と韓国語母語話者男女の大学生友人間のロールプレイで行った会話、全 128 会話における「謝罪談話」を、「総合的会話分析」（宇佐美、2006b；2008）の方法論に基づいて分析し、謝罪という言語行動の日韓、および男女の類似点や相違点等の特徴を、実際の会話データを用いて、文レベル、談話レベルの双方から明らかにしたものである。また、「ポライトネス理論」（Brown and Levinson、1987）の一部である公式を枠組みとして理論の検証を行うために、謝罪する必要のある行為の相手にかかる「負担度」（迷惑度）の大小を統制して比較対照した結果、特に負担度が軽い場面においては日韓、男女による違いが顕著なものが現れたが、負担度が重くなると日韓、男女の相違点より、共通点のほうが顕著になることを明らかにし、それらの結果をディスコース・ポライトネス理論の枠組みによって考察した。

以下、本論文の構成と各章の概要をまとめる。本論文は、約 400 頁に及ぶ全 9 章からなる「本文」と、約 280 頁の日韓のロールプレイ会話の文字化資料を中心とする「資料集」

から成っている。

第 1 章は、導入部にあたり、「謝罪」という言語行動が、対人コミュニケーション上重要な役割を果たすため、異文化間コミュニケーションをはじめ、様々な分野で研究されてきているという背景が整理される。その上で、①単に発話レベルの言語形式のみならず、談話レベルから研究すること、②謝罪会話全体の下位項目として「謝罪談話」という単位を設け、謝罪談話の構成とその展開を考察すること、③謝罪行動（謝罪発話文）のみならず、謝罪に対する反応も併せた相互作用として分析することによって、謝罪談話の日韓対照研究、ポライトネスの普遍理論に貢献するとともに、言語教育への示唆も目指すという本研究の目的が提示される。

第 2 章は、先行研究の概観部にあたる。まず、本研究で用いられる「謝罪」の定義を行った後、発話内行為としての「謝罪」の適切性条件が考察される。その上で、日本語と韓国語、及び、日韓対照研究における「謝罪」の先行研究が概観され、従来の研究では、謝罪する側のみにも焦点を当てたものが多いこと、一発話文レベルの分析がほとんどであること、調査方法が DCT (Discourse Completion Task) などの書かせるものがほとんどで、実際の会話データを分析したものがほとんどないことなどの問題点を指摘する。続いて、「ポライトネス研究」の流れを概観した上で、「謝罪行動」に現れる対人配慮行動のメカニズムを解明するためには、Brown and Levinson の「ポライトネス理論」と宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点からの考察が有効であることが論じられる。また、談話、テキスト、会話分析に関する先行研究、及び、本研究が用いるロールプレイ調査方法に関する先行研究を概観し、それらの方法論を批判的に検討した上で、本研究の方法として「総合的会話分析」(宇佐美、2008)を用いることの妥当性が論じられる。最後に、データを記述するための日本語と韓国語の文字化の原則、システムについても主要なものの検討がなされている。

第 3 章では、本研究の方法論が具体的にまとめられる。「総合的会話分析」という実証的方法論に基づいた本研究の会話データの収集方法、ロールプレイ場面の設定条件、負担度の差の認定方法、文字化の方法、データの信頼性(「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」の算出)の確認方法など、実証的方法論に沿った本研究の方法とそれに適した手順が述べられる。具体的には、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論(politeness theory)」におけるポライトネス・ストラテジーを決定する負担度 (W_x) を算出する公式 ($W_x=P+D+R_x$) に基づいて、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面の 2 つの場面を R 要因として設定し、日韓母語話者(男女)に、それぞれ大学の同級生、同性の友人と二人でロールプレイを行ってもらい、R 要因の影響を分析した。また、本研究が用いた文字化システ

ムである「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美、2011年改訂版)と「基本的な文字化の原則の韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS)」(宇佐美、2007)が説明される。

第4章では、文字化における発話文の改行方法、及び、各章の分析のコーディングの信頼性が「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」を算出した上で、確認される。また、「会話の流れの自然さ」、「話し方の自然さ」、「録音の意識度」についての妥当性をフォローアップ・アンケートの調査によって確認した上で、「会話データの基本情報」として、協力者の属性、各会話の会話時間、発話文数等の基本的な記述統計が提示される。

第5章では、ロールプレイを行った「謝罪会話」全体は、「謝罪行動とそれに対する反応」のやりとりを含む複数の「謝罪談話」から構成されると捉え、単位として設定する。

「謝罪談話」という単位を設定することによって「謝罪会話」における謝罪談話の種類と出現順、謝罪談話の展開の仕方、そこに現れる謝罪する側と謝罪される側の相互作用の特徴が記述される。主な結果は、以下の通りである。

①負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、明確な「謝罪定型表現」を含む「核談話」のやりとりだけで簡単に謝罪が受け入れられ、会話が収束する傾向にあり、また、明確な謝罪表現を含まない「挿入談話」や「後続関連談話」も多く現れた。②韓国語男性は、「核談話」が現れる前に「交渉談話」のやりとりを行うという特徴を見せた。③負担度が軽い場合には、謝罪内容と直接関係のない「挿入談話」を用いて、謝罪場面和らげ、お互いのフェイスを配慮しようとする傾向が多く現れた。④負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に「核談話」のみならず「交渉談話」のやりとりが重要であり、「核談話」と「交渉談話」のやりとりによって、謝罪される側が謝罪内容を受け入れるか、受け入れないかが決定される傾向が見られた。⑤日本語母語話者は、謝罪場面で、謝罪定型表現を含む「核談話」が現れることに対し、肯定的な反応をしている。⑥「核談話」が現れず「交渉談話」のみ続く会話は、謝罪される側に謝罪内容が受け入れられないことが日本語母語話者の女性には多かったが、韓国語母語話者では、謝罪定型表現がなく、「交渉談話」のやりとりのみであっても謝罪が受け入れられる会話も現れていた。⑦負担度が重い場合は、「核談話」のみならず、「前置き談話」や「交渉談話」が多く現れる一方、謝罪する側が自分自身のフェイスを考え、明確な謝罪表現を含む「核談話」を用いない傾向が、日韓に共通して現れることが明らかになった。

第6章では、「謝罪行動のプロセス」の日韓母語話者の類似点や相違点等が考察される。その結果、日韓母語話者の謝罪行動の共通点は、①負担度が軽い場合は、「謝罪」、「責任関連」の2種の発話文が、負担度が重い場合より多く用いられる。②負担度が重い場合には、

「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の3種の発話文が、負担度が軽い場合より多く用いられる。これらの結果から、「負担度が軽い謝罪場面」では、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、謝罪する側は、自分のフェイスを守るより、相手の「フェイス侵害度」を軽減することを優先して、「謝罪発話文」を多用する傾向にあると解釈できる。しかし、「負担度の重い謝罪場面」では、謝罪内容が重くて深刻であるがために、相手のフェイス侵害度を軽減したいという欲求より、自分のフェイスを守りたいという欲求のほうが優先され、明確な「謝罪発話文」が減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えていると解釈する。すなわち、謝罪する事柄（「フェイス侵害行為」）が重くなればなるほど、謝罪する側と謝罪される側が互いに「フェイス充足行為」を行うなどして働きかけ、「フェイス均衡」のための複雑なフェイスワークを行っているということが日韓に共通していることが分かった。

一方、「負担度が軽い謝罪場面」において、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文を用いて謝罪行動を行っている。この点は日韓で共通しているが、韓国語母語話者は、「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」もかなり用いるという相違点が見られた。謝罪される側は、日韓ともに、「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行っていたが、韓国語母語話者では、「代償要求発話文」も多く用いられていた。一方、「負担度が重い謝罪場面」においては、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文を用いており、謝罪される側は、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を用いている点が共通している。ところが、韓国語母語話者は、「過失修復発話文」も多く用いるという違いがあった。また、ここでも負担度が重くなると日本語母語話者と韓国語母語話者の行動が類似しているということが明らかになった。

第7章では、謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現が用いられた発話(謝罪発話文)」やその直後の「謝罪される側の応答(応答発話文)」を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用が分析される。主な結果は以下の通りである。①「負担度が軽い謝罪場面」では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」を多用し謝罪していたが、「なだめ」は韓国語女性にのみ現れていた。「肯定的な応答」は、韓国語母語話者が3割程度であるのに対し、日本語母語話者は6割程度と、韓国語話者の2倍程度用いていることがわかった。その反面、「否定的な応答」は、日本語女性に比べ、韓国語男性が5倍以上多く用いていることがわかった。②「負担度が重い謝罪場面」では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」のみならず、「事態言及」や「なだめ」も用いる傾向が見られるとともに、より複雑な「謝罪発話文」が用いられていた。「肯定的な応答」を用い

る割合は、日本語男性で4割程度、日本語女性ではほぼ6割程度であり、韓国語母語話者では男女とも5割程度であった。「ニュートラルな応答」は、日韓共に女性が多く用いていたが、「否定的な応答」は、日韓共に男性が多く用いていた。③負担度が軽い場合には、相手のネガティブ・フェイスを配慮し、謝罪と責任認めを用いる傾向が多く現れている。④一方、負担度が重い場面では、相手のネガティブ・フェイスを配慮する発話のみならず、自分のフェイスも考えて事態に言及する発話や、相手のポジティブ・フェイスに訴えかける「なだめ」も用いる傾向があった。すなわち、負担が重くなると、相手のフェイスや自分のフェイスを総合的に考え、「フェイス均衡」のため、互いがより積極的に働きかけていることが明らかになった。

第8章は、5章、6章、7章の分析結果を「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から理論的に考察した章である。「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」を構成する各要素の「基本状態」を同定し、そこから離脱した言語行動(有標行動)がもたらすポライトネス効果(プラス効果、ニュートラル効果、マイナス効果)を相対的に捉えて、実証的なデータをもとに考察している。その上で、言語行動を正確に捉えるためには、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点から談話レベルで考察することが重要であること、また、一発話文レベルの分析では言語行動の正確な解釈には限界があるため、文レベルの要素も含めた、より長い談話レベルで諸要素を分析することが重要であるというディスコース・ポライトネス理論の主張を、実証的に検証している。

第9章は、終章である。本研究の実証的結果の全体的なまとめをしてから、ポライトネス理論、及び、外国語教育への示唆を述べる。ある言語行動(発話行為)の全体像を捉えるためには、相互作用の観点が必要であること、ポライトネスの普遍理論を実証的に追及するためには、グローバルな観点とローカルな観点の双方から分析することが必要であることなどを示唆した。また、外国語教育への示唆としては、言語行動を一発話文の単純なやりとりレベルで学習させることの問題点を指摘し、発話文レベルや談話レベルの特徴を総合的に学習させることの重要性が強調される。また、当該言語文化における言語行動の「基本状態(discourse default)」と「有標行動(marked behavior)」がもたらす効果について、学習者に情報提供することが重要であるという新しい示唆を行っており、教育実践にも貢献しうる提言で締めくくる。

審査の概要、及び評価

審査委員会が高く評価した点は、以下の6つに集約できる。(1) 定量的、定性的分析双方を行うという分析方法が緻密で実証的であることによって、結果の信頼性を高めていること。

(2) 堅実な方法論を用いて、謝罪行動における日韓、男女による共通点と相違点を特定することができ、対照言語学的に意義深い記述がなされていること。(3) 比較対照研究の結果を、普遍理論の枠組みから考察することによって、普遍理論に実証的裏付けを与えたこと。(4) 各言語文化における言語行動の「基本状態 (discourse default)」と「有標行動 (marked behavior)」がもたらす効果について指摘し、日韓両言語の教育実践にも重要な示唆を与えることができたこと。(5) 本研究のように条件を統制して収集された日韓、男女の謝罪会話のデータが未だほとんどないため、データ自体が貴重でその価値は高く、関連領域にも多大な貢献しうる点。(6) 総合的にみて、堅固な方法論を用いており、結果とそこから導き出された独自の解釈の信頼性が高く、今後のより自立的・独創的な研究への発展が期待できる点。

各審査委員から疑問、或いは、問題点として指摘された点は、以下の3つに集約できる。(1) ロールプレイの場面や関係設定については、より厳密な記述 (友人関係、負担度の定義など) と条件統制 (負担度の軽重だけが要因になるような会話場面の設定など) が望ましいのではないか。(2) 通言語的に見ると日韓の言語行動は相対的に近いとも言える。より大局的な観点から自分の研究結果の一般化と、ポライトネス理論への貢献を目指すべきなのではないか。(3) 対話参与者同士のフェイスや立場のバランスを取るという観点から言語行動を解釈する枠組みには、ポライトネス理論以外にも様々な理論 (例えばバフチンの理論など) があるので、より視野を広げて対人コミュニケーションを考える必要がある。

ただし、これらは、本研究の意義を損なうものではなく、むしろ今後の研究の発展のための助言であると捉えられる。また、口述試問では、これらの指摘について、本人は、既に自覚しており、今後の修正や発展についての考えも持っていることが、その受け答えから明らかになった。

以上のことから、本論文は、テーマの明確性、先行研究の理解、利用された資料の質と量、一貫した方法論と論述の構成、結論の重要性のいずれについても、博士論文としての要件を十分に満たしていると認められた。したがって審査委員会は、全員一致で、本研究を博士 (学術) の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。